

プチャーチンとの「日魯通商条約の締結」へと続いた一連の出来事の中で、ロシアとロシア人を知るための資料になったものと見做せます。また、この『環海異聞』にはロシア使節と漂流民を搭乗させたイワン・クルーゼンシュテルン艦隊の航路となったヨーロッパの沿海国イギリスやフランスなどの国々の状況も記載されています。特にここから、ナポレオン戦争で崩壊状態にあったオランダについて、長崎の商館が漏らすことのなかった情報を幕府は確実に把握したのです。

このような内容から、本書はオランダ商館から提出された世界情報である「風説書」^{ふうせつがき} (6) の中でも、同国が独立を回復した1813（文化十）年以降の信憑性の高いものや、前述の『捕影問答』などの警世的な著作、そして、その後に出来た外国関係の書物と合わせて、幕閣の海外知識の原点になっていたのではないのでしょうか。そして、これらの文献こそ国是として国を閉じた、所謂、鎖国の体制を維持するための資料で、開国を迫ろうとする欧米諸国の情勢を分析する情報であったものと推測できます。

事実、前述のロシアの南下政策への対処以外

でも、通商関係の樹立を求めて再三にわたって訪れた外国船の要求を拒絶し続け、退去させていました。しかし、『環海異聞』の成立から46年を経た嘉永六（1853）年、遂にアメリカのマシュー・ペリーが日本の土を踏み、念願であったロシアからもエフィミー・プチャーチンが彼に続いたのです。

主な参考文献と註記

- (1) 古田東朔「大槻玄沢」（日蘭学会編『洋学史事典』所収。雄松堂書店1984年。）109-110頁。
- (2) これらの著作の内、版本については刊行年を記載しているが、自筆稿本としてさらに早い時期に成立していたものもある。
- (3) 神崎順一「翻刻 大槻玄沢著『捕影問答』（一）一天理図書館所蔵日欧交渉資料（八）一」（天理図書館『ビブリア第128号 2007年。』）に、翻刻と共に成立と流布に関する説明がある。
- (4) 石山洋「『環海異聞』の成立をめぐる 大槻玄沢の海外事情研究の一齣」（洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』思文閣出版 1991年。）231-233頁。
- (5) 大槻玄沢・志村弘強編 杉本つとむ他解説『環海異聞本文と研究』八坂書房1986年。469-470頁。
- (6) 長崎へ入津したオランダ船による海外情報。幕府は鎖国体制の完成した寛永十八（1641）年にオランダ商館に長崎奉行への「風説書」の提出を義務付け、幕末の安政六（1859）年まで続いた。途中、記述が形骸化された時期や、本国が戦乱に巻き込まれて船が来航できない時期があった。

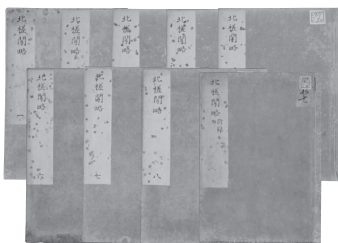
おく まさよし（司書・副館長）



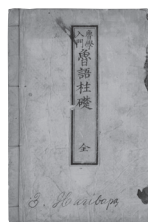
発信型図書館を
目指して

ロシア語学科開設記念稀観書展示会

鎖国時代からの日露交渉史料と同時期のロシア文学



鎖国期の日露交渉史料
桂川国瑞(甫周)著『北槎聞略』



明治時代のロシア語研究書
大島良一撰『魯語柱礎 魯學入門 全』



ロシア文学の原典
ドストエフスキー、F. M. 『罪と罰』

只今、コロナ感染対策の一環として開催を延期しています。